

市民の目線で市民が発信する  
地域情報紙

WEB SHIMIN

# SHIMIN PRESS

## 市民プレス：号外

発行人 特定非営利活動法人  
「市民フォーラム」

編集人 原 昭 二  
制作・印刷 デジタル工房  
FAX 048 (476) 9111  
〒353-0004  
埼玉県志木市本町 5-18-24

### 米軍朝霞基地跡地に 高層2棟850戸建設

6月26日、朝霞市は、国と県を交えた「基地跡地整備計画策定委員会」第4回合会で、跡地の中心部の北西角の3ヘクタールに、国家公務員宿舎として、26階建て(高さ約78m)と25階建て(高さ約75m)の高層住宅、2棟を建設する財務省案を受入れることを決めた。

財務省案によれば、宿舎は3分の1が家族用、残りの3分の2が単身者用で、2008年に着工、3年後の完成を目指す。中心部の残り13ヘクタール余りの用地を朝霞市が買取り、公園などを建設する計画で、市が求めている跡地の払い下げについては、今後朝霞市と国との協議が続けられる。

反発する市民は少なくない。市民感覚から懸け離れた決着に失望した市民は少なくない。跡地利用については議論してきた公募百人による「市民懇談会」のメンバーは、一年あまりの議論は一体何だったか、という思いを深くかみ合っている。



今回の合意は、跡地の中心部の土壌汚染とその除去などの課題が浮上したため、国は建設予定地を積極的に中心部に移し、一方朝霞市は、今後に控えている多くの問題、特に財政的な課題を考慮しつつも、苦衷の色を隠さない。

市民団体の要求する運動が盛り上がり、昭和四十九年日米政府間の協議によって、一部の地域を除く大部分のキャンプ地の返還が決まった。

敗戦によって米軍跡地の中心部に接収され、一帯は「キャンプドレーク」と呼ばれ、被服廠の跡地は「ノースキャンプ」となった。戦時中には、朝霞駅の手前から分岐した線路が引かれ、被服廠内に製品や材料を輸送していたが、接収されてからも、米軍の専用列車は基地内に直接乗入れ、物資の輸送に使用した。また朝鮮戦争の出兵にも使われた。

返還された土地の一角に中央公園、総合体育館などを建設、この地域は大きな変貌を遂げた。

朝霞駅前には、昔は田や畑を耕す人がいなくなり、雑木林を掃いて堆肥をつくる人もいなくなつて、荒れ果てた。

誰かが困っていたとき、政府の指令を受けた人々が、留守を守る女性や老人、子供の家を訪れ、被服廠の用地としての農地を買い占めていった。

印鑑をもって役場に集められ、政府の方針であると説明して、農地の譲渡を強制した。「坪当り一円五十銭で印を押させられた」そうである。長年耕作に当ってきた地主の関係者は、その頃を思い出していまも無念な思いに駆られている。

幸いに戦争から帰還できた農家の男性も、ふたたび農業に就くことができなくなり、落胆した。

あの頃の光景は、被服廠があったころ、朝霞駅を降りると、畑の向こうに町役場があり、その前は、竹矢来の垣根が長く長く続き、中には、被服廠の建物の他、多数のシートをかけた荷物山が積まれていた。

戦後敷地内に積まれていた物資は、米軍の進駐に備え、近くの農家の納屋に移されたが、終戦直後は無政府状態となり、混乱に乗じてこれらの物資を夜中に盗む人々の影は絶えなかった。滅茶滅茶な、そして浅ましい光景だった。

被服廠(ひふくしょう)は、軍人が身につける軍服、靴、鉄兜などをつくる施設で、戦争の拡大と共に本廠が手狭になったため、その分廠をつくることになり、東京近郊の朝霞に白羽の矢が立った。

それより前、昭和二十九年に基地の一部(いまの市庁舎の部分)が返還され、県立川越高校定時制の校舎が建設されたが、昭和四十二年朝霞町は市政を施行し、四十七年には新市庁舎で業務を開始した。

野原には兎や狐が飛び回っていたという。明治時代になつても、畑と武蔵野の雑木林が続いていた。

大正三年に東武東上線が開通、「膝折駅」ができたが、二、三軒の商店のほかに見られるべきものは無く、静かな農村だった。

田や畑を耕す人がいなくなり、雑木林を掃いて堆肥をつくる人もいなくなつて、荒れ果てた。

誰かが困っていたとき、政府の指令を受けた人々が、留守を守る女性や老人、子供の家を訪れ、被服廠の用地としての農地を買い占めていった。

印鑑をもって役場に集められ、政府の方針であると説明して、農地の譲渡を強制した。「坪当り一円五十銭で印を押させられた」そうである。長年耕作に当ってきた地主の関係者は、その頃を思い出していまも無念な思いに駆られている。

資料…金子真 / 戦前と戦後の十年、「季刊にいくらごおり」第十三号(1979)

あさかの歴史(朝霞市史編三室編)、発行/朝霞市